
編集後記

2018 年は明治維新から 150 年の memorial year であった。

明治維新には謎が多く、その一つにドイツ医学の導入がある。

イギリス公使館医師ウィリスは戊辰戦争で多くの戦傷者を治療し、四肢切断、骨折の治療、銃弾の除去、クロロフォルム麻酔、過酸化マンガン水による防腐など、新しい外科技術を日本人医師に伝えている。ウィリスはその功績から日本の医学校・病院の院長兼医学教師に就任しており、イギリス医学を日本の医学に導入しようという雰囲気の中、それまで全くといってよいほど日本と関係のなかったドイツ医学が日本の医学として導入されたのである。

19 世紀中頃から第一次世界大戦まで、医学論文を含め注目すべき学術論文はイギリス、フランス、アメリカの各国と比較してドイツから最も多く発表されており、フルベッキは「ドイツ医学が当時世界最高」と述べている。

江戸時代の医者華岡青洲の言葉に「活物窮理」がある。

「活物窮理」とは、“活ける物すべての理を窮める”という意味である。

当時の日本人の志が「活物窮理」に通じるものであったとすれば、ドイツ医学の導入に合点がい。そしてその成果の代表が、長井長義のエフェドリンの発見であろう。

一方で、「ドイツ医学の研究室医学」、「イギリス医学の病院医学」という言葉がある。

近年、頻繁に用いられる Evidence Based Medicine : EBM (根拠に基づく医療)はイギリス医学の流れを汲む。

日本人の多くが「根拠に基づく医療」を、“病の原因を解明した上で実施される医療”と勘違いしている理由は、日本の医学が 150 年前のままだと信じて疑わないからなのだろう。

今年ノーベル賞を受賞された本庶佑・京都大学高等研究院特別教授は、「教科書を信じるな」と発せられた。今、分かったとされていること＝教科書に書かれていることは、生命の理の極々一部であるにも拘らず、それを信じて、全てが分かったかのごとく振舞い、歩みを止めてしまうことを戒める言葉なのであろう。

真摯に受け止めて、また一步を踏み出そう。

平成 30 年 12 月 25 日

日本東洋醫學研究會 会長 松本和久

日本東洋醫學研究會誌 2018 vol.4

編集・発行	日本東洋醫學研究會誌 編集委員会
発行日	平成 30 年 12 月 25 日
発行者	日本東洋醫學研究會
